

第1学年 社会科学学習指導案

日 時：令和元年10月24日（木）第5校時
学 級：1年A組23名（男子12名、女子11名）
場 所：1年A組教室

1 単元名 「武士の台頭と鎌倉幕府」

2 指導の立場

(1) 教材観

本教材では、学習指導要領歴史的分野の目標（2）、内容B（2）のイ（ア）を受け、生徒の思考・判断・表現力を高めていく。

目標（2）

歴史に関わる事象の意味や意義、伝統と文化の特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりなどに着目して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し複数の立場や意見を踏まえて公正に選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。

内容B 近世までの日本とアジア

(2) 中世の日本

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること

(ア) 武士の政治への進出と展開、東アジアにおける交流、農業や商工業の発達などに着目して、事象を相互に関連付けるなどして、アの（ア）から（ウ）までについて中世の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現すること。

※（ア）武家政治の成立とユーラシアの交流

（イ）武家政治の展開と東アジアの動き

（ウ）民衆の成長と新たな文化の形成

承久の乱は、1221年（承久3年）後鳥羽上皇が鎌倉幕府から政権を奪回しようとして起こした戦いである。武家政権である鎌倉幕府の成立後、京都の公家政権との二頭政治が続いていた。しかし、源氏が三代で途絶えたのを好機ととらえた上皇は、諸国の武士に北条義時追討の院宣を発した。ところが、北条氏と御家人の結束は固く、「諸国の武士の大半は朝廷側につくだろう」という上皇の思惑に反し、大半が幕府軍についたため、京都を幕府軍に占領され、敗れた。乱後、上皇は隠岐に流されるなど朝廷の権威は失われ、幕府に従属することとなった。同時に、幕府の力が西国にまで及び、全国を支配するきっかけとなった。また、京都に六波羅探題を設置し、皇位継承にも影響力をもつこととなった。

承久の乱の特徴の一つとして、後鳥羽上皇が目指した社会についての考えと北条政子が目指した社会についての考えの対立が挙げられる。朝廷の代表である後鳥羽上皇と幕府の代表である北条政子が諸国の武士たちに自分の主張を訴え、身の振り方を論じている。このように主張が分かれた一つの歴史的な事象について、生徒一人一人が朝廷側か幕府側か、自分の立場を決定し、資料をもとにその立場にした根拠を明らかにして互いに主張し合う学習は、現代社会を生きる生徒にとって、意義あることと考える。

(2) 生徒の実態

歴史的分野、地理的分野のどちらの学習に対しても落ち着いて取り組むことができる。また、毎時間、「事象提示→課題づくり→個人追究→ペア交流→全体交流→まとめ」という流れで授業を行ってきたため、授業の流れを理解して取り組むことができる。しかし、全体交流で意見は出るものの、仲間の意見につないだり比較したりする力が弱く、「○○さんと同じで……」と安易に賛成の表現をしてしまう生徒がいるのが現状である。その原因として考えられるのが、個人追究の場面でそれは資料

のどの部分からいえるのか、根拠を明らかにしたり、事象と事象を比較して考えたりする力が弱いことである。そこで、個人追究の際、根拠となる表現に確実に線を引き、その表現から読み取ったことを書くことを指導していきたいと考える。

また、互いに伝え合うことはできても、自分たちで考えを練り合うことがなかなかできないため、学習課題に対して、互いに自分の考えを主張したり、質問したりする機会を位置付けた。本時の討論会の司会は教師だが、生徒の力によって進めていくことができるように、今後は討論会を段階的に進化させていきたいと考える。

3 研究主題に関わって

〈研究主題〉

主体的・対話的な学びを通して、たくましく自分を表現し「確かな学力」を身に付ける生徒の育成

〈研究内容〉

II 主体的・対話的な活動を位置付けた単位時間の工夫

①主体的・対話的な学びを生み出すための、対話的な活動の位置付け

- ・承久の乱で、全国の武士たちは朝廷側と幕府側のどちらにつくと思うか、自分が武士となって考え、どちらかの側（立場）を選択する。そして、互いにその立場の主張を読み取った後、同じ立場同士で交流する場を位置付けた。その意図は、同じ立場同士で交流することで、討論会で自信をもって自分の意見を述べるができるようにすることと、なぜ自分と同じ立場にしたのか、複数の根拠（理由）や様々な見方や考え方に気付き、自分の考えを深めることである。そして、交流を通して、討論に必要な情報を自分から求めていく力を付ける機会にしたいと考える。
- ・朝廷側と幕府側の2つの立場のどちらかを選択する際、選択の足掛かりをつくるために、第1時では平安時代のころの武士の扱われ方、第2時では太政大臣の平清盛も天皇（朝廷）から任命されて政治ができたことや天皇や上皇など朝廷や院に逆らうと朝敵（つまりは日本全体の敵）となること、第3時では征夷大將軍の源頼朝も天皇（朝廷）から任命されて政治ができたことや御恩と奉公の主従関係を丁寧に押さえていく。さらに既習事項として掲示をしていくことで、生徒たちが振り返りがしやすいようにし、考える足場となるようにしていきたいと考える。。

4 単元指導計画（全7時間）

時	ねらい	学 習 活 動	評価規準
1	<p>武士の成長について関心をもち、単元を貫く課題を意識しながら、本単元に願いをもって学習することができる。</p>	<p>1 資料「武士の成長」から、当時の武士はどのような仕事をしていたのか確認する。</p> <p>2 課題を設定する。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">武士はどのように成長していったのだろうか。</p> <p>3 資料をもとに追究する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・棟梁を中心とした武士団が組織されている。 ・各地で起きた騒乱に勝利した。 ・自ら開発した土地を皇族や貴族、寺社に寄進し、土地を支配する権利を保護してもらった。 <p>4 追究したことをペアで交流する。</p> <p>5 全体交流する。</p> <p>本時のまとめを書く。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">武士は自ら開発した土地を皇族や貴族、寺社などに寄進し、土地を支配する権利を保護してもらい、実質的に支配した。そして、家来をまとめて武士団をつくった。中でも天皇の子孫である源氏と平氏は大きな勢力をもっていた。さらに、東北では奥州藤原氏が勢力をもっていた。</p> <p>6 単元を貫く課題を設定する。</p> <p style="border: 1px dashed black; padding: 2px;">貴族にかわり、武士はどのようにして全国を支配していったのだろうか。</p>	<p>武士の成長について関心をもち、単元を貫く課題を意識しながら、本単元に願いをもって学習しようとしている。【関心・意欲・態度】</p> <p>※武士は当時、貴族に牛馬のようにこきつかわれ、働かされていた低い身分であったことを押さえておく。</p>
2	<p>資料を追究し、交流することを通して、武士が大きな争乱に勝利して、政治の実権をにぎったことがわかる。</p>	<p>1 資料「力を持った白河上皇」から、上皇の近くで武士はどのような仕事をしていたのか確認する。</p> <p>2 課題を設定する。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">武士はどのようにして政治の実権をにぎったのだろうか。</p> <p>3 資料をもとに追究する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・天皇家が2つに分かれて争った保元の乱や権力者同士で争った平氏の乱に勝利した平清盛が政治の実権をにぎり、思うがままに政治をしていた。 ・清盛の死後も続いた源平の争乱に勝利した源頼朝が武士の頂点に立ち、武士中心の世の中をつくろうとしていた。 <p>4 追究したことをペアで交流する。</p> <p>5 全体交流する。</p> <p>6 本時のまとめを書く。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px;">藤原氏の権力が衰えたのをきっかけに、朝廷では天皇にかわり、上皇が権力をもち、院政を始めるようになった。その後も天皇と上皇の争いは続き、それぞれに武士がついて、2つの大きな騒乱が起きた。そして、保元の乱と平治の乱に勝利した平清盛が政治の実権をにぎった。清盛の死後も源平の争乱が続き、源頼朝や源義経をはじめとする源氏が勝利し、武士の世界の頂点に立った。</p>	<p>武士が大きな争乱に勝利して政治の実権をにぎったことを読み取っている。</p> <p>【技能】</p> <p>※上皇を中心とする院や朝廷に武士や領地が集まり、大きな権力をもっていたことを押さえておく。</p> <p>※平清盛も朝廷から「太政大臣」に任命されて政治を行うことができたことを押さえておく。</p> <p>※朝廷のトップである天皇や上皇に逆らうことは、「朝廷の敵（朝敵）」つまり「日本全体の敵」になるということを押さえておく。</p>

3	<p>資料を追究し、交流することを通して、源頼朝が武士の政権をつくった過程がわかる。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 「源頼朝」と伝えられる肖像画を見せ、頼朝が鎌倉幕府をつくったことを確認する。 課題を設定する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">源頼朝はどのようにして武士の政権をつくったのだろう。</div> 資料をもとに追究する。 <ul style="list-style-type: none"> 国ごとに守護、荘園や公領ごとに地頭を置き、武士が国や土地を支配した。 頼朝は鎌倉幕府を開いて、中央と地方の支配体制を築いた。 将軍と御家人の間に、御恩と奉公の主従関係を結び、関係を強化した。 追究したことをペアで交流する。 全体交流する。 本時のまとめを書く。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">源平の争乱に勝利した源頼朝は、国ごとに守護、荘園や公領ごとに地頭を置いて、支配体制を整えた。また、鎌倉に幕府を開き、中央と地方の支配体制を築いた。さらに、御家人との間に御恩と奉公の主従関係を結び、武家政権の基盤をつくった。</div> 	<p>資料を追究し、交流することを通して、源頼朝が武士の政権をつくった過程を読み取っている。【技能】</p> <p>※将軍と御家人は、「御恩と奉公」という強い主従関係で結ばれていたことを押さえておく。</p> <p>※源頼朝も朝廷から「征夷大將軍」に任命されて政治を行うことができたことを押さえておく。</p>
4 本時	<p>「北条義時追討の命令」や「北条政子の演説」などの資料を追究し、討論会を行うことを通して、承久の乱で全国の武士の多くが幕府側についてのは、御恩と奉公による主従関係の結び付きの強さが、朝廷の命令以上であったからであることがわかる。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 鎌倉幕府の成立～承久の乱の経過を確認する。 <ul style="list-style-type: none"> 将軍頼朝が没した後、幕府の政治が不安定になり、その状況をチャンスと見た後鳥羽上皇が承久の乱を引き起こし、幕府と争った。 課題を設定する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">全国の武士たちは、承久の乱で朝廷側と幕府側のどちらについて戦ったのだろう。</div> 課題について、御家人はどちらの側につくか予想する。 予想をもとに自分の立場を決定し、資料追究する。 (朝廷側の主張) <ul style="list-style-type: none"> 鎌倉幕府では、幼児を将軍に立てて、執権北条義時が勝手に政治をしているし、上皇の命令に従ったらほうびは望むままにもらえるから。 将軍が上皇に忠誠を誓っているから。 (幕府側の主張) <ul style="list-style-type: none"> 幕府を開いた頼朝からもらった御恩(官位や俸禄)は山よりも高く、海よりも深いほど大きなものだから。 もし、幕府側が負けてしまったら、昔みたいに武士が牛馬のように働かされてしまうから。 追究したことを同じ立場同士で交流する。 討論会を行い、意見を交流する。 実際の歴史の動きを紹介し、本時のまとめを書く。 	<p>「北条義時追討の命令」や「北条政子の演説」などの資料を追究し、討論会を行うことを通して、承久の乱で全国の武士の多くが幕府側について理由を考察している。【思考・判断・表現】</p>

		<p>全国の武士たちは、日本の王である上皇に逆らうと朝敵になってしまい、幕府に逆らうともらった土地や位を認めてもらえず生活できなくなるので、どちらにつくか迷った。迷いながらも武士たちは御恩と奉公の関係を重視し、幕府側について戦った。その結果、承久の乱は幕府側の圧勝に終わり。幕府は朝廷側から没収した土地に新たに地頭を置いたため、幕府の支配は全国に広がった。</p>	
5	資料を追究し、交流することを通して、鎌倉時代の武士と農民の暮らしについて理解する。	<p>1 課題を設定する。</p> <p>鎌倉時代の人々は、どのような暮らしをしていたのだろう。</p> <p>2 資料をもとに追究する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地頭は領主と争い、土地の半分が与えられるようになった。 ・武士は武芸の訓練を行い、「弓馬の道」や「武士（もののふ）の道」と呼ばれる心構えが育った。 ・農民は農業技術の開発により、二毛作を行った。 ・自社の門前や交通の要所に定期市が開かれ、新しい町が生まれた。 <p>3 追究したことをペアで交流する。</p> <p>4 全体交流する。</p> <p>5 本時のまとめを書く。</p> <p>武士は質素に生活し、武芸に励んでいた。中でも地頭は領主と争い、土地の半分以上を獲得した。農民は農業技術の発達により、二毛作を行い、農作物の収穫が増加した。また、定期市が開かれ、新しい町がつくられた。その結果、民衆が徐々に力を付けていくこととなった。</p>	資料を追究し、交流することを通して、鎌倉時代の武士と農民の暮らしについて理解している。 【知識・理解】
6	鎌倉時代の文化は武士の力強さがあらわれていたり、宗教は民衆や武士の心のよりどころとして広まったりしたことがわかる。	<p>1 課題を設定する。</p> <p>鎌倉時代の文化と宗教には、どのような特徴があるのだろう。</p> <p>2 資料をもとに追究する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運慶の金剛力士像など、武士のように力強い彫刻作品が生まれた。 ・争乱の後、武士や民衆の心のよりどころとして、鎌倉新仏教が数多く生まれた。など <p>3 追究したことをペアで交流する。</p> <p>4 全体交流する。</p> <p>5 本時のまとめを書く。</p> <p>鎌倉時代の文化は、新古今和歌集のような優れた朝廷文化や運慶の金剛力士像など、武士のように力強い彫刻作品が生まれた。また、武士の活躍や民衆の姿をあらわした優れた文学作品が生まれた。さらに、争乱の後、武士や民衆の心のよりどころとして、鎌倉新仏教が数多く生まれた。</p>	鎌倉時代の文化は武士の力強さがあらわれていたり、宗教は民衆や武士の心のよりどころとして広まったりしたという特徴を理解している。【知識・理解】
7		単元テスト	

5 本時のねらい

「北条義時追討の命令」や「北条政子の演説」などの資料を追究し、討論会を行うことを通して、承久の乱で全国の武士の多くが幕府側についていたのは、御恩と奉公による主従関係の結び付きの強さが、朝廷の命令以上であったからであることがわかる。【社会的な思考・判断・表現】

6 本時の展開（4／7）

過程	学 習 活 動	指 導 ・ 援 助
<p>つかむ</p> <p>考</p> <p>え</p> <p>る</p> <p>深</p> <p>め</p> <p>る</p> <p>ま</p> <p>と</p> <p>め</p> <p>る</p>	<p>1 鎌倉幕府が成立してから承久の乱に至るまでの経過を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 将軍頼朝の没後、幕府の政治が不安定になり、その状況をチャレンスと見た後鳥羽上皇が承久の乱を起こし、全国支配をめぐつて幕府と争った。 <p>2 資料「北条義時追討の命令」と「北条政子の演説」を提示し、本時の課題を設定する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>全国の武士たちは、承久の乱で朝廷側と幕府側のどちらについて戦ったのだろう。</p> </div> <p>3 課題について予想する。</p> <p>(朝廷側につく)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本の王である上皇に逆らうと朝敵になるから。 <p>(幕府側につく)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 幕府から御恩をもらっていて、奉公するのは当たり前だから。 <p>4 予想をもとに、自分の立場を決定し、資料追究をする。</p> <p>(朝廷側の資料)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 資料1 「北条義時追討の命令」 ・ 資料2 「3代将軍源実朝の和歌」 <p>(幕府側の資料)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 資料1 「北条政子の演説」 ・ 資料2 「一大決戦」 <p>5 朝廷側と幕府側に分かれて討論会を行う。</p> <p>(朝廷側の言い分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 幕府では幼児を将軍に立てて執権北条義時が勝手に政治をしているし、上皇の命令に従ったらほうびを望むままにもらえるから朝廷側につく。(資料1) ・ 将軍が上皇に忠誠を光っているくらいだから、朝廷側につく。(資料2) <p>(幕府側の言い分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 幕府を開いた頼朝からもらった御恩は山よりも高く、海よりも深いほど大きなものなので、その恩に報いるために幕府側につく。(資料1) ・ もし幕府が負けてしまったら、武士は昔みたいに牛馬のように働くことになるから、幕府側につく。(資料2) <p>6 承久の乱の結果とその後の経緯を紹介し、まとめを書く。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>全国の武士たちは、日本の王である上皇に逆らうと朝敵になってしまい、幕府に逆らうともらった土地や位を認めもらえず生活できなくなるので、どちらにつくか迷った。迷いながらも武士たちは御恩と奉公の関係を重視し、幕府側について戦った。その結果、承久の乱は幕府側の圧勝に終わり。幕府は朝廷側から没収した土地に新たに地頭を置いたため、幕府の支配は全国に広がった。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経過については、年表（平安後期～鎌倉時代）などの掲示物を用いて確認しやすいようにする。 ・ 承久の乱については、後鳥羽上皇と北条政子の顔を貼り、鎌倉幕府が成立していたのにも関わらず、朝廷側と幕府側の2つの勢力で争ったことを確認する。 ・ 資料「北条義時追討の命令」と「北条政子の演説」を提示することで、自分が武士ならどちらの側につくと思うか、予想する足掛かりとする。 ・ 予想し、自分の立場を決定したら、黒板にネームプレートを貼り、自分の立場を意識するとともに、対立を強調することで追究意欲を高める。 ・ 朝廷側の主張の資料から、朝敵となることに対する恐れがあることと、征夷大將軍といえども朝廷から任命されて初めて政治ができ、身分差が大きいことに気付けるようにする。 ・ 幕府側の主張の資料から、今の生活があるのは、頼朝から御恩として土地や位をもらっているからであり、もし幕府側が負けたら、鎌倉以前の牛馬のように貴族にこきつかわれていた時代に戻ってしまうからまずいということに気付けるようにする。 ・ 同じ立場同士の交流の場面では、討論会で自信をもって発表することができるように、自分と仲間の意見を比較し合う。 ・ 討論会では、教師が板書で意見を集約し、意見を述べやすくする。 ・ 討論会で議論しているうちに、自分の考えに迷いが生じ、違う立場に変えたいという意見が出た場合も認め、価値付ける。 ・ 実際は、朝廷側約1万9千人、幕府側約19慢人で争いが起こり、幕府側が鎌倉を出発してからわずか20日あまりで京都を制圧し、朝廷側を破ったという結果を提示し、武士たちにとって幕府からもらった御恩の存在がいかに大きかったのか実感できるようにする。 ・ 本時のまとめを書く際、「朝敵」と「御恩と奉公」の2つのキーワードを使って書くように促し、的確にまとめが書けるようにする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>《評価規準》</p> <p>「北条義時追討の命令」や「北条政子の演説」などの資料を追究し、討論会を行うことを通して、承久の乱で全国の武士の多くが幕府側についていた理由を考察している。【社会的な思考・判断・表現】</p> </div>

【朝廷側追究資料】

資料1 「^{ご と ぼ じょうこう ほうじょうよしときついでう}後鳥羽上皇の北条義時追討（たおす）の命令」（1221年5月15日）

最近の鎌倉幕府の政治は大変乱れている。将軍がいるといっても、まだ幼児である。それで執権（将軍を支える役職）の北条義時（北条政子の弟）は、何事につけても北条政子（源頼朝の妻）の命令であるといって、全国に対して政治や裁判を行っている。朝廷（天皇を中心にした政治組織）を恐れないその態度は許せないものである。よって、全国の武士たちに命令である。執権北条義時をたおせ。この命令にしたがった者には、ほうびは望むままに与える。

「小松美一郎氏所蔵文書」ほか要約

資料2 「^{みなもとのさねとも}3代将軍源実朝の和歌」

山がさけ、海の水がかれるような時代になっても、私（源実朝）はあなた（後鳥羽上皇）への忠誠（^{ちゆうせい}必ずしたがうこと）の心は変わりません。

「金槐和歌集」より要約

【幕府側追究資料】

資料1 「北条政子の演説」（1221年5月19日）

みなの方、心を一つにして聞きなさい。これは私の最後の言葉である。頼朝様は鎌倉に幕府を開いてから、お前たちに恩賞を与え、お前たちの領地を守ってくれた。この恩は山よりも高く、海よりも深い。しかし今、朝廷にさからう者として、北条義時追討の命令が上皇から^{はっ}発せられた（出された）。みなの中で、上皇の命令にしたがおうという者があれば、私を殺して鎌倉を焼き払って京に向かいなさい。

「吾妻鏡」より要約

資料2 「一大決戦」

承久の乱は、まさに東国に基礎を置く幕府と、西国中心に勢力をもつ朝廷との一大決戦だったのだ。もし幕府が勝てば、西国も完全に支配し、武家の政権は全国を支配する。だが、もし幕府が敗れば、幕府は事実上つぶされ、「頼朝より前の時代」に戻ることに考えられる。それは、武士は何の権利も認められず、^{ぎゅうば}牛馬のように働かされていた時代、つまり朝廷が全国を支配していた時代に戻ってしまうのである。

井沢元彦「逆説の日本史」より要約